

職業婦人イメージの形成と良妻賢母規範

濱 貴子 (京都大学)

1. はじめに

本報告では、戦前期の代表的婦人雑誌『主婦之友』、『婦人倶楽部』、『婦人公論』に掲載された「職業婦人」を中心とした女性と職業に関する記事を検討することを通じて、職業婦人イメージの形成と良妻賢母規範との関係を明らかにする。

戦前期の日本では、第一次世界大戦を契機とする産業化の進展や第三次産業の拡大に伴う安価で柔軟な労働力需要の高まりなどの市場要因と、物価騰貴と不況による生活難の進行やモダン都市文化と呼ばれる消費文化の広まり(南 1987, 1990)といった家庭要因とが相俟って、賃金労働に従事する女性の数は飛躍的に増加していった(国勢調査 1920, 1930, 1940)。さらに、女子の義務後教育機関への進学率の高まり(福島・村越 2005)は知識や技術を必要とする事務的、専門的な色彩の仕事に女子が参入する機会の拡大をより一層後押ししていた。

このように実態レベルでは職業に就く女性が増加する一方で、当時思想レベルでは「良妻賢母規範」と「女性解放思想」とが併存し、女性の生き方をめぐって社会的議論が活発化していた。家族主義と性別役割分業観を特徴とする「良妻賢母規範」は高等女学校の制度化の進展を背景に社会へ浸透し(小山 1991)、メディアを通じて魅力的な主婦イメージが形成されていった(牟田 1996, 木村 2010)。その一方で「女性解放思想」も青鞥社の活動をはじめとして、その後 1920 年代以降、婦選運動や無産婦人運動などさまざまな婦人運動が展開されていくなかで育まれていった。

そのような状況のなかで、専門・技能・事務・サービス職などの女性を中心として職業に就く女性は「職業婦人」と呼ばれるようになる。先行研究は、彼女らを近代的職業進出のさきがけであり女性解放を体現する存在としてみなし、増加の背景や実態、また彼女らの存在が良妻賢母規範・家制度(家父長制)に与えたインパクトなど、戦前における職業婦人の構造と社会的影響を明らかにしてきた(岩下 1969, 永原 1982, 村上 1983, 米田 1994 など)。つまり、従来の職業婦人研究では、されており、「職業婦人」と「良妻賢母」は対立するものとして構図が描かれていた。

しかしながら、このような職業婦人と良妻賢母

を対立関係でとらえる構図は、近代日本における良妻賢母思想を研究した小山(前掲書)によってその修正を促す言及がなされている。小山は第一次大戦後には、女性が「家事・育児に支障のない範囲で(p.168)」「女性の特性(p.161)」を発揮できる分野の職業に就くことは良妻賢母思想からはずれるものではないという新しい良妻賢母像が登場してきたことを指摘している。

しかし小山の研究は良妻賢母思想を中心としたものであり、職業婦人が中心に扱われているわけではなく、どのような過程を経て職業婦人の存在が良妻賢母思想からはずれるものではなくっていったのかということは明らかにされていない。また、小山も含め先行研究における分析対象は主に大正期の職業婦人にとどまっている。しかし職業婦人が大幅に増加したのは上述したように 1920 年代から 30 年代にかけてであり、職業婦人の増加とそれにとまなう社会の職業婦人に対するまなざし、つまり職業婦人イメージの形成と変化については検討されていない。

そこで本報告では、第一次大戦以降戦前期までの職業婦人イメージはどのような過程を経て形成・変容していったのか、そしてそこには職業婦人の社会的位置づけのどのような変化が影響を与えていたのか、という問いを設定し、職業婦人を歴史社会学的な角度からとらえ直すこととした。

2. 資料と方法

2. 1. 資料

本報告での分析に用いた資料は次の 3 つである。

- 1) 『主婦之友』(主婦之友社、1917 年創刊)
- 2) 『婦人倶楽部』(大日本雄弁会講談社、1920 年創刊)
- 3) 『婦人公論』(中央公論社、1916 年創刊)

三誌に掲載された記事のうち、分析対象としたのは創刊から第二次世界大戦(1945 年 7 月号)までの紙面に掲載された女性と職業に関する記事である。「女性と職業」に関する記事とは、三誌各号の目次に目を通し、①記事名に「女性」「婦人」に加えて「職業」「労働」「働く」といった言葉を含むもの、②記事名に「教員」「事務員」など具体的職業名を含むもの、③女性労働に関連のある記事のうち賃金労働に関連するもの、以上の三つのい

ずれかに該当する記事である。

2. 2. 方法

本報告では、次の手順で分析を行う。第一には、女性と職業に関する記事を形態別に「評論記事」「実用記事」「レポート」「手記」「座談会」「グラビア」の6つに分けそれぞれの雑誌の全体的特徴を比較する。第二には、上で分類した記事それぞれについて各誌ごとにその特徴と変容を検討する。第三には、各誌における職業婦人イメージの形成と変容を良妻賢母規範との関連から考察する。

以下では、タイトルに「職業婦人」という言葉を含む記事について基本的な分析結果を示す。

3. 結果

3. 1. 全体的傾向

「職業婦人」という言葉を題名に含む記事が掲載されるようになったのは1921年から22年にかけてであった。「主婦之友」と「婦人倶楽部」では1921〔大正10〕6月号で「職業婦人」という言葉が記事名に初めて使われた。「主婦之友」では「職業婦人の悲痛なる叫び」、「婦人倶楽部」では「職業婦人生活の実際」という記事名で両方とも手記であった。一方、「婦人公論」はやや遅れて翌年1922〔大正11〕2月号で「自由論壇 職業婦人の勇気」という評論記事が初出であった。

表1は「職業婦人」という言葉が用いられる記事の各誌の傾向である。

表1. 各誌の「職業婦人」記事の傾向 (%)

	評論	実用	レポート	手記	座談会	その他	計	実数
主婦之友	5.7	22.7	11.1	11.1	13.5	15.8	159.7	6
婦人倶楽部	15.8	21.7	3.5	35.3	2.9	4.8	159.7	44
婦人公論	50.0	15.4	15.4	11.8	5.3	2.5	159.7	25

主婦之友は他の二誌と比較して、レポート(21.1%)、グラビア(15.8%)、座談会(10.5%)の割合が高い。このうちレポートは20年代30年代通して割合が高く、座談会、グラビアは1930年代以降に記事数が増加している。

婦人倶楽部は他の二誌と比較して、手記(38.5%)と実用記事(31.8%)の割合が高い。手記、実用記事ともに20年代～30年代通して一定の割合で掲載されている。

婦人公論は他の二誌と比較して、評論記事(50.0%)の割合が顕著に高かった。

3. 2. 評論記事

表2. 各誌の「評論記事」の傾向 (%)

評論記事	男	女	男・女	無署名	計	実数
主婦之友	40.0	40.0	0.0	20.0	100.0	3
婦人倶楽部	57.1	28.6	14.3		100.0	7
婦人公論	30.8	61.5	7.7		100.0	26

次に、それぞれの記事の形態ごとに各誌の特徴を検討する。まず、評論記事については、執筆者

の男女比で異なった傾向が見られた。「主婦之友」では男女比は半々、「婦人倶楽部」では男性のほうが女性よりも多かったのに対し、「婦人公論」では女性執筆者の割合が約6割と男性よりも高かった。

3. 3. 実用記事

表3. 各誌の「実用記事」の傾向 (%)

実用記事	働き方	美容 ファッション	健康	結婚	計	実数
主婦之友	30.8	53.8	15.4	0.0	100.0	13
婦人倶楽部	71.4	14.3	0.0	14.3	100.0	14
婦人公論	50.0	25.0	25.0	0.0	100.0	8

次に、実用記事については、「主婦之友」では「美容・ファッション」のテーマの記事の割合が53.8%と最も高かったのに対し、「婦人倶楽部」と「婦人公論」では「働き方」記事がそれぞれ71.4%、50.0%と最も割合が高かった。

3. 4. レポート・手記

表3. 各誌の「レポート・手記」の傾向 (%)

レポート 手記	「職業婦人」イメージ				計	実数
	+	±	-	0		
主婦之友	16.7	12.5	33.3	37.5	100.0	24
婦人倶楽部	10.0	25.0	5.0	60.0	100.0	20
婦人公論	16.7		16.7	66.7	100.0	12

最後に、レポート・手記については、「主婦之友」では、「職業婦人の悲痛なる叫び(1921〔大正10〕6月号)」、「職業婦人哀話(1934〔昭和9〕4月号)」、「男子の誘惑に苦しめられた職業婦人の悲痛な体験(1938〔昭和13〕4月号)」といった他の二誌に比べて職業婦人のネガティブな側面に注目した記事の割合が高かった(33.3%)。一方「婦人倶楽部」では他の二誌に比べて、「喜びか悲しみか職業婦人の偽らざる手記(1924〔大正13〕10月号)」、「職業婦人は奥様として何故好かれるでせうか嫌はれるでせうか(1929〔昭和4〕8月号)」、「職業婦人の楽しさ苦しさ—私の人生打明け話(1934〔昭和9〕6月号)」といった職業婦人のポジティブな側面・ネガティブな側面両面ともに注目する記事の割合が高かった(25.0%)。「婦人公論」については、「職業婦人の手記(1924〔大正13〕夏季臨時増刊号)」、「職業婦人から家庭の母になった経験(1934〔昭和9〕8月号)」、「職場訪問：都会の職業婦人の生活(1939〔昭和14〕3月号)」といった評価をしないニュートラルな記事の割合が三誌中最も高かった(66.7%)。

4. 当日の報告

当日は、これらの基礎的な結果をもとにさらに分析を進めて、戦前期の婦人雑誌における職業婦人イメージの形成と変容を良妻賢母規範との関連から総合的に考察する。

(資料・参考文献等については当日資料に記載いたします。)